

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町10番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

『総合社会福祉研究 第55号』

◆特集／コロナ禍の経験をふまえて

再興する地域福祉の今後の方向性を展望する

〈座談会〉コロナ禍とこれからの地域福祉と社会福祉協議会
荻田藍子／岸佑太／山口浩次／志藤修史（聞き手）

その他

◆海外情報◆

「人間らしい生活」保障を求め続ける韓国
——『韓国・福祉改革のダイナミズム』から……………金早雪

※無料でダウンロード可能です！「福祉のひろばHP」よりアクセスしてください。

編集・発行／総合社会福祉研究所

〒543-0055 大阪市天王寺区悲田院町8-12

国労南近畿会館3階

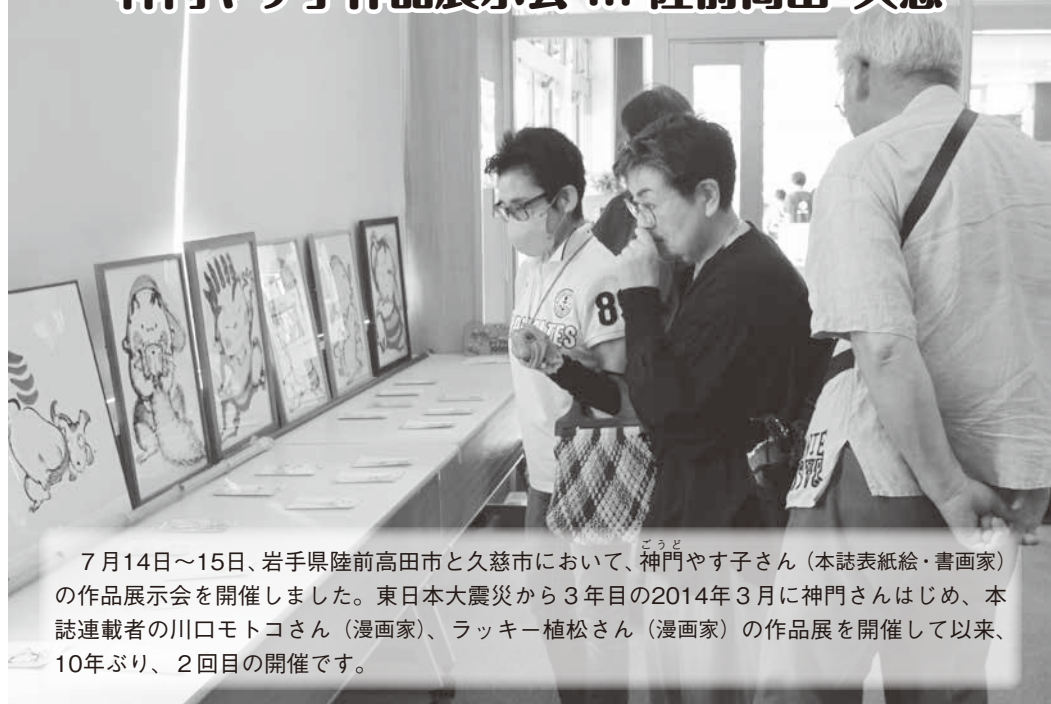
TEL:06-6779-4894 Mail: mail@sosyaken.jp



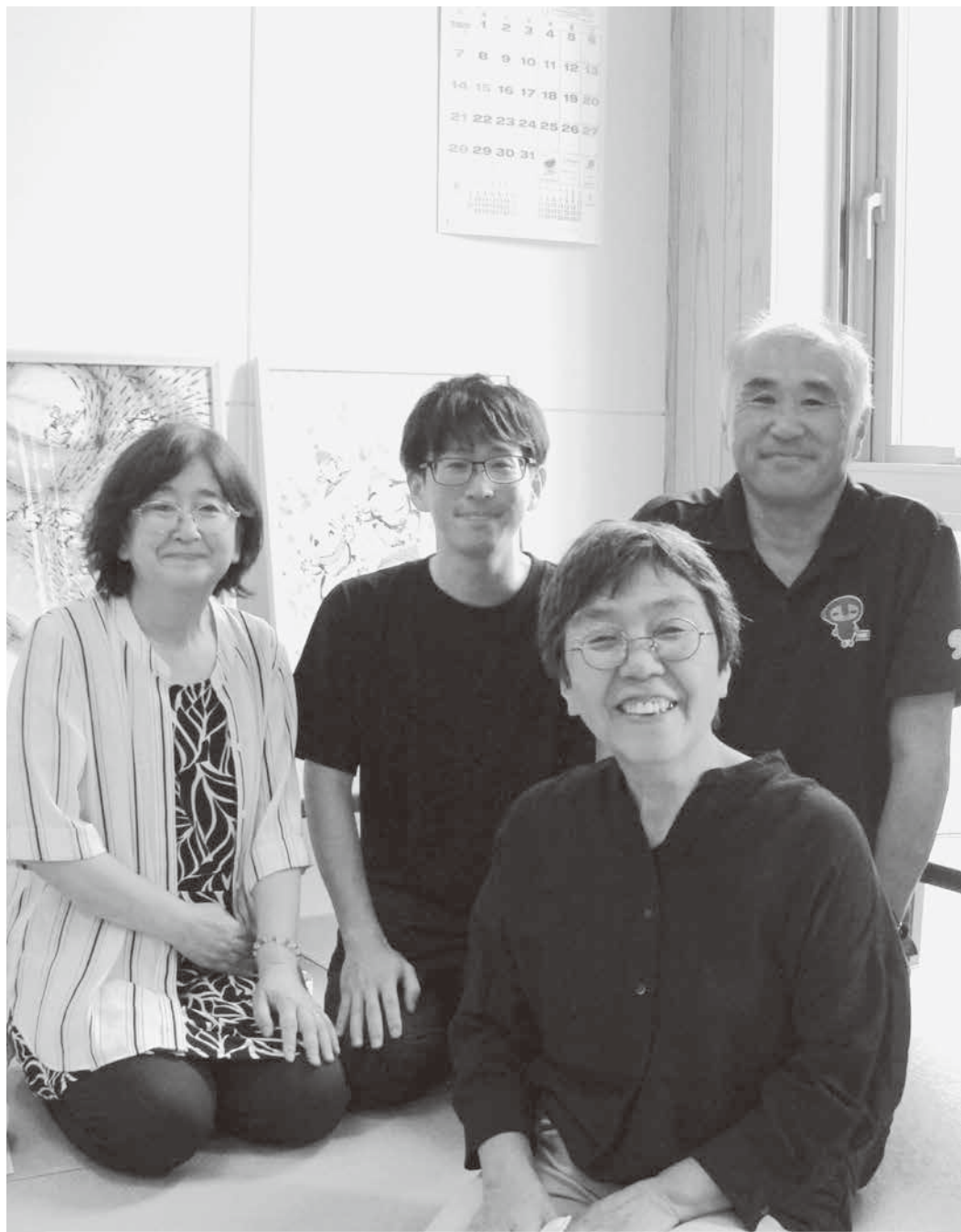


10年ぶりの再会

神門やす子作品展示会 in 陸前高田・久慈



7月14日～15日、岩手県陸前高田市と久慈市において、^{ごうど}神門やす子さん（本誌表紙絵・書画家）の作品展示会を開催しました。東日本大震災から3年目の2014年3月に神門さんはじめ、本誌連載者の川口モトコさん（漫画家）、ラッキー植松さん（漫画家）の作品展を開催して以来、10年ぶり、2回目の開催です。



この10年間、毎年陸前高田と久慈のみなさんにそれぞれ100本以上、自身の作品のカレンダーを届けてこられた神門さん。「毎年、カレンダーを見て元気をいただいています」と、陸前高田の会場に駆けつけてくださったご家族です（写真）。「月が終わってめくったカレンダーの絵は、捨てずに額に入れて飾っています」と話される方もおられました。



久慈の会場では、「気持ちがあたたかくなる絵ですね」と涙を流される方も。久慈市議員の城内仲悦さん（写真左）は、創刊号に近い1990年代からの本誌の読者で、現在は、久慈市内で44人もの読者さんを広げてくださっています。久慈市内のさまざまな現場で高齢福祉や障害福祉、保育、看護、地域の活動・運動にかかわっておられるみなさんが、城内さんと『福祉のひろば』を通じてつながっていることを、現地のみなさんと交流するなかであらためて感じました。



展示会では、神門さんによる絵本の朗読と人形劇も上演。「震災から13年がたち、いまでもこうして思いを寄せてくれる人がいることが、とてもありがたいです」「物の復興は果たせたように思いますが、心の復興は未だ果たせていないように思います」と感想をいただきました。陸前高田学校の校長も勤めてくださっていた菅野悦雄さん、久慈で読者を広げてくださっている城内仲悦さん、そして神門さんのカレンダーを通してつながっている陸前高田・久慈のみなさんとの10年越しの再会やあらたな出会いに、神門さんも「夢のような時間だった」と話されました。

(写真・文 申佳弥)

【ひろばトーク】

「地域医療を守れ」のバトンを引き継いで 中野るみ子 6

●特集● 陸前高田と久慈をたずねて～会員・読者さんとの交流～

震災から13年、陸前高田の暮らし	11
支えられていまを生きる	長谷地由加里 18
おいしい米を守りつづけるために	ライスランド久慈 21
陸前高田と久慈をたずねて～参加者感想～	24

●サブ特集● 「地域医療構想」を考える

医療費亡国論から医療費富国論へ転換を！	本田 宏 28
地域での暮らしを支える医療のあり方	黄 驥 34
自分が決めた場所で自分らしく生きていける社会をめざして	
	黒岡 有子 38

●トピックス●

尊厳あるくらしを取り戻すために	
——大阪市による避難者追い出しを許さない	朴 仁淑 42
住まいの貧困を考える	藤原 望 46
～最終回 人権という観点から、住まいの貧困を考える～	

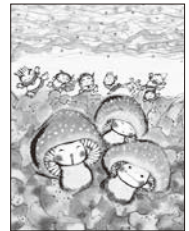
●連載●

なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場	
楽しそうな息子の日々を守りたい	谷岡 隆子 52
続・ヘルパー歳時記	
ほんとうに困っていることはなんだろう①	56
WORK WORK——わくワク——	YSG 60
どなたにでも喜ばれるような物をつくりたい	
JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合 (43)	
全国一律最低賃金制度の実現で地域格差の解消と賃金の底上げを	62
私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (43)	
みんなが主人公の組織づくりをめざして！	前田 千代 64
阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (63)	水野阿修羅 66
育つ風景 保育園の劇の役決めドラマ	清水 玲子 68
映画案内 『太陽がいっぱい』	吉村 英夫 70
現代の貧困を訪ねて	生田 武志 72
生活保護申請から支給まで1か月かかる問題	
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート	
道場破りあらわる！	ラッキー植松 74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜 76
花咲け！ 男やもめ	川口モトコ 77

福祉のひろば

2024年10月号

●表紙の絵●
神門やす子



みんなのポスト 50／福祉の動き 78／今月の本棚 81

●グラビア● 10年ぶりの再会

～神門やす子作品展示会 in 陸前高田・久慈

「地域医療を守れ」の バトンを引き継いで

いわて労連議長 中野 るみ子

私は、一九八三年に看護師として岩手県立病院に就職し、就職と同時に労働組合（岩手県医療局労働組合・略称「県医労」）に加入しました。以降、看護師を休職しての組合専従役員を、途中現場に戻りながら合計七年担い、二〇一三年四月より、看護師を離職し県医労の専従となりました。その後定年を迎えて二〇二二年七月に退職し、八月からはいわて労連事務局で働くこととなり今に至ります。

自分自身、なぜ看護師をしながら長く組合の役員をしたり、最終的には現場を離れて専従として組合活動に関わる決断ができたのかとふり返ると、やはり、つねに自分のなかに「怒り」があったからだと思います。あまりにも忙しく、じっくり患者さんに関わらず、「ちょっと待ってください」ばかりになってしまいう状況、患者さんや医療現場の安全・安心もおびやかされている状況に対してです。根本的な原因は、医師や看護師の不足にあり、なんとかしたいという思いがありました。

岩手県の県立病院の歴史は、昭和初期の「医療機関に恵まれない農村漁村住民が自ら医療を確保するため、協同で医療機関を持つとする運動」にはじまります。「せめて死ぬときだけでも医者に診てもらいたい」という住民のみなさんの願いが「創業の精神」となって、「県下にあまねく良質な医療の均てんを」とうたわれています。しかし、一九五〇年の設立以降、県立病院の歴史は国の政策や方針に沿うように「統廃合」や「合理化」「縮小再編」などの攻撃の連続だったと言えると思います。これに対し、座して待つのではなく、労働組合が住民のみなさんとともに「地域医療を守れ」の運動を進めてきた歴史があります。私が就職した当初も、先輩看護師が白衣で地域に出てアンケートや署名活動をおこなうなど、大きな運動を巻き起こしているときでした。労働組合が地域に出て活動することを、目の当たりにしてきたのです。私たちがそのバトンを引き継いで、自分自身がそこに身を置いていることのしあわせを感じてきました。



なかの るみこ

1983年看護師として岩手県立かみまい軽米病院に就職し、県医労加入。1987年に岩手県立中央病院に転勤。1998年より本部専従（4年）。2003年より医療現場にもどり、2010年よりふたたび本部専従（3年）。2013年4月に離職し県医労専従。2022年より「岩手県労働組合連合会（いわて労連）」議長。「地域医療を守る岩手県連絡会」代表。

二八あつた県立病院は、現在、二〇病院、六診療所となっています。総務省が出した公立病院のガイドラインに沿うかたちで、県立病院の無床化（診療所化）が進められ、私たちは「地域医療を守れ」の運動を大きく広げましたが、二〇〇九年に六つの病院の無床化が強行されたのです。その無床化を推進したのは、達増拓也たつぞうたくや現知事です。二〇一年に東日本大震災が発生した際には、震災後の復興計画に、被災した三つの県立病院（高田病院、大槌病院、山田病院）の再建が盛り込まれませんでした。私たちは、このままでは被災地の地域医療が崩壊してしまうという危機感で、パブリックコメントを出し、宣伝行動をして、二〇一一年秋の知事選挙では候補者も立てて、必死でたたかいました。知事選挙は敗れ達増知事が再選しましたが、選挙後、知事は三つの県立病院の再建を宣言しました。その後も、被災者の医療費減免継続にも力を入れ、憲法一三条の幸福追求権を掲げています。二〇二三年の知事選では、私たちいわて労連も推薦を決定し、全国からの応援もいただきながら奮闘し、五期目の当選に貢献しました。知事の姿勢を変えたのは、住民があきらめず声をあげ、運動し、「どこに住んでいても私たちには医療を受ける権利がある」ということをブレずに訴えてきた、まさに、住民の日常的な「不断の努力」の結果だと思っています。

「ものづくりによる経済成長」をめざす日本の経済のあり方は限界がきています。すでにヨーロッパなどでは、医療や福祉の分野で雇用を充実させ、そこにお金をかけて地域経済を循環させる方向に舵が切られはじめています。日本も、第一次産業の活性化で地域を元気にし、食料自給率を上げ、社会保障・医療・福祉の分野を活性化させることで経済や社会を循環させていく方向に転換すべきだと思います。そうした社会のあり方をめざして、次の世代にもしっかりとバトンを引き継いでいけるように活動していきたいと思っています。

地方での暮らしを守るようになり

二〇一四年、政府は団塊の世代が七五歳を迎え、医療や介護の需要が最大化する年を「二〇二五年問題」とし、その際に必要となる病床数を推計し、効率的な医療提供体制を実現することをめざす、「地域医療構想」を制度化しました。「地域医療構想」の発端は、二〇一二年の「社会保障・税一体改革法」と「社会保障制度改革推進法」で、医療費を抑え込むことが大きな目的です。大きな柱として、公立・公的医療機関の見直し論議が先行し、国は公立・公的医療機関に対し、業務の見直し計画や、再編・統合に向けた合意形成を求めました。しかし、見直しが十分にすすんでいないとして、二〇一九年、国は全国の一四二四の公立・公的医療機関を、「再編・統合の議論が必要な病院」として名前を公表しました。

こうして、医療費抑制を目的に地域から医療・医師を奪う政策がすすめられてきた結果、いま、地域ではなにが起きているのでしょうか。巻頭「トーク」での中野るみ子さんのお話をはじめ、岩手県陸前高田市・久慈市でのお話や、能登半島被災地からの報告などから、「地域医療構想」が実際にもたらした問題を考えます。

人々の暮らしを維持し、守っていくときに、医療は不可欠です。身近に医療がなければ、助けられるはずの命が助けられなかったり、住み慣れた地域に住みつづけることをあきらめなければならなくなりま

す。人口が減少し、高齢化がすすむ地域の医療を維持するために税金を投入することは、無駄なことでしょうか。医療費を抑制することを目的に、そこに住みたい人の住み続ける権利を奪うことは許されることでしょうか。

都心に住む人々の生活は、地方で第一次産業に携わっている人たちがつくってくれた農作物や海産物に支えられています。八月末現在、都心のスーパーからお米がなくなる「令和の米騒動」が大きなニュースとなっていますが、この騒動は、まさに第一次産業とそれを担う人たちがどれだけ大切かということを物語っています。大企業の成長や戦争の準備に税金を投入するために、国民の暮らしにとって欠かせない食を守る第一次産業やそれを担う人たちの暮らしを軽視し、地方で住み続ける権利を奪うことが、許されるはずがありません。

本誌でもこの間、「経済成長」のためには医療費や社会保障費は抑えなければいけない」という考え方を転換する必要があることを考えてきました。今号でも、本田宏さんが、医療費によって国が潰れるのではなく、むしろ医療や福祉が充実することで私たちの生活はゆたかになるのだと、「医療費富国論」を論じてくださいました。輸出入や投資による成長ではなく、国内の第一次産業を守り、全国どこでも安心・安全に暮らしつづけることができることを守ることで循環する経済や社会のかたちがあるはずです。私たちは、経済成長のために生活しているわけではありません。すべての人の命と暮らしを守り、人をしあわせにするために経済活動があるのだということを、あらためて押さえたいと思います。

(編集主任 申)